

加温栽培‘デラウェア’におけるカリウム欠乏症の発生予測と防止法

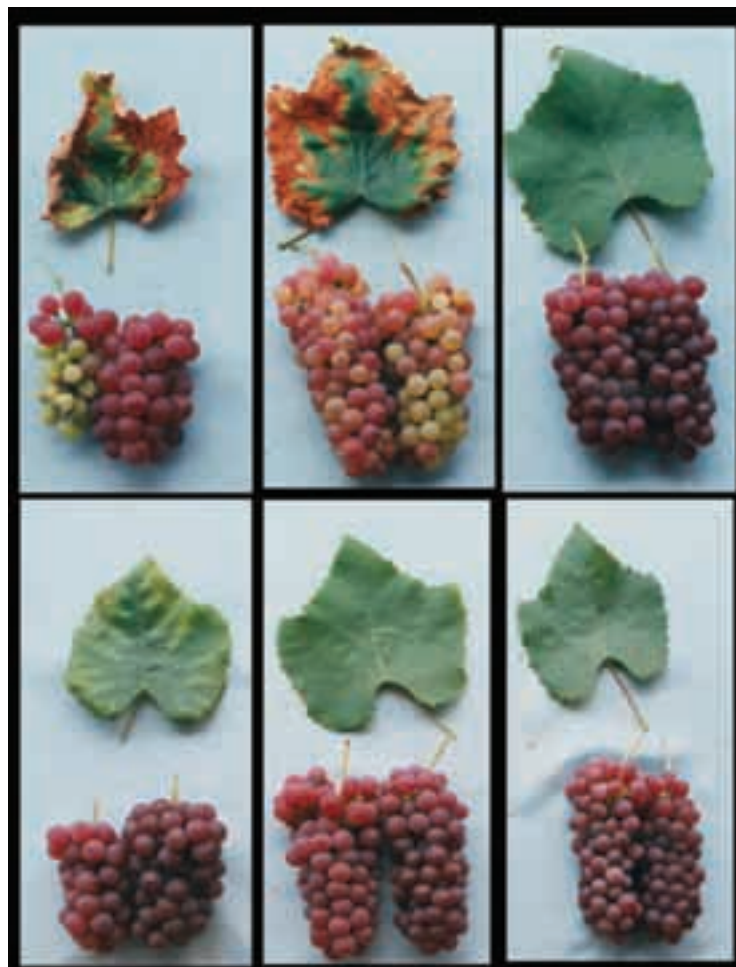
園芸部果樹科 藤本 順子

12～1月に加温を開始する超早期～早期加温栽培‘デラウェア’では、カリウム欠乏症の発生が多く、そのため結実や果粒肥大が劣り、問題となっています。葉柄汁液による診断は、樹体内のカリウム栄養状態を把握するための有効な方法の一つで、これまでに小型反射式光度計を用いて迅速に測定できる方法や適正診断葉位を明らかにしてきました。ここでは、この方法を用いてカリウム欠乏症の発生予測とその防止法を検討しました。

開花期における第5葉の葉柄汁液中カリウム濃度が2,350ppm以下の場合、開花後40日頃

から葉縁枯死等のカリウム欠乏症状が発生し、果実品質も劣りました(図1、上左・上中央)。そこで、開花2～3週間後にカリウムを施用したところ、葉縁黄化が認められる個体があるものの果粒肥大や糖度の上昇に悪影響は認められませんでした(図1、下左・下中央)。一方、2,700ppm以上では、カリウム施用の有無に関わらず、葉、果実とも異常は認められませんでした(図1 - 上右、下右)。

現在、開花期の葉柄汁液中カリウム濃度に応じた追肥施用量を決定する方法を検討しています。



1700ppm以下 1400～2350ppm 2700～3450ppm
開花期における葉柄汁液中K濃度

図1 カリウムの施用効果

注) 写真 上段：無施用 下段：施用